

平成21年6月10日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006 ～ 2008  
 課題番号：18730544  
 研究課題名（和文） オーセンティック・アセスメントに基づく社会系教科の授業理論と学習評価方略の研究  
 研究課題名（英文） a study of lessons and assessment theories based on authentic assessment.  
 研究代表者  
 藤本 将人（FUJIMOTO MASATO）  
 北海道教育大学・教育学部・講師  
 研究者番号：10404229

## 研究成果の概要：

本研究では、「オーセンティック・アセスメント」と呼ばれる評価理論を社会科に対応させ、我が国の教育現場で利用可能な目標準拠評価の体系的理論と分析ツールを示すことが目的であった。本研究では、オーセンティック・アセスメントの代表的教材を取り上げ、社会科授業の開発過程を確定し、教授案形式でモデル化することに成功した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	270,000	3,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：評価

## 1. 研究開始当初の背景

2001年4月、戦後直後から採用された「相対評価」を否定して、「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」を全面的に採用するように、公的文書により評価に関する方針転換が通知された。

この公的文書による方針の転換は、教育現場の評価の実践に甚大な影響を及ぼしているが、現場教員から具体的授業に対応させた評価の方法が確立できていないという実践する上での根本的な課題が提出されていた。

特に評価情報を分析する方法、また分析結果を授業・生徒にフィードバックする方法が

理論的に提供されていないという意見が教育関係諸学会で提出されていた。

以上のような教育現場から寄せられた実践上の問題を解決するためには、授業構成と評価方法を一体化して考察し、授業における生徒の認識結果を確定・査定する評価理論の提供が必要となる。これまでわが国の社会科教育関係諸学会においても、その必要性が強く唱えられてはきたものの体系的かつ具体的な提案を施した主張は皆無であった。

研究代表者が行う研究の最終的な着地点は、「オーセンティック・アセスメント」と呼ばれる評価理論を社会科に対応させ、わが

国の教育現場で利用可能な目標評価の体系的理論と分析ツールを示すことにあった。

## 2. 研究の目的

本研究では、アメリカ社会科教育（初等・中等）におけるオーセンティック・アセスメントの授業について、「教科書及び関連教材における記述内容」「授業実践内容」「生徒の認識変容分析」の三つの観点から調査を行った上で評価の体系的理論を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

以下の点を明確にすることで研究の目的を達成しようとした。

- (1) オーセンティック・アセスメントにおける授業の目標はどのように構成されているのか【目標構造の抽出】
- (2) その目標を達成するために、どのような授業が組み込まれているのか【授業構成理論の抽出】
- (3) その授業では、生徒に対する学習評価の仕組みがどのように組み込まれているのか【評価手法の分析】
- (4) 評価の結果得られた情報は具体的にどのように分析されているのか【情報の分析手法の検討】
- (5) 評価情報は授業や生徒の学習にどのようにフィードバックされているのか【情報の利用方法の検討】

これらを明らかにするために、以下のよう  
な研究の手順を採用した。

### (1) 文献による調査

日本・アメリカ合衆国の学会誌及び教育実践情報雑誌（社会科教育学・教育評価論、教育哲学）におけるオーセンティック・アセスメントの理論的・実践的研究に関する文献調査を行った。

（国内渡航地：東京、名古屋、福岡、国立国会図書館、東京大学、名古屋大学、京都大学、広島大学、九州大学を中心に、必要性は高いが当地で入手困難な国内外文献資料を調査した。

海外渡航地：アメリカ合衆国、ミシガン州、ミシガン州立大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校）

### (2) 教育現場での調査

アメリカ合衆国において、オーセンティック・アセスメントの社会科授業を行っている現場を訪問し、指導案、及び学習教材の収集・カリキュラムデザイナーにインタビューを実施した。また生徒が実際に書いたテストの答案用紙を収集した。

### (3) 収集した資料をファイリングし、教科教育学の手法で分析した。

## 4. 研究成果

本科研の経費を用いて、アメリカ合衆国を訪問し、ミシガン州教育省カリキュラム・コーディネーターの Karen R Todorov にインタビューすることができた。

彼女は、ミシガン州の小・中・高等学校教師にオーセンティック・アセスメントの授業の在り方を説明するだけでなく、現場教師の実践指導を仕事としている人物である。

彼女とはオーセンティック・アセスメントに関する実践上の課題と授業の組織化について議論することができた。また、この訪問によって、ミシガン州が全学年に行うテスト（Michigan Educational Assessment Program: MEAP）のテスト問題と実際に子どもたちが記述した解答用紙のコピーを入手することができた。

日本に帰国後、彼女に対するインタビューと入手したテスト問題及び解答用紙の分析から以下のことを明確にすることができた。

- (1) 学習成果を捉えるために、アメリカで実践された社会科授業とその開発過程を確定し、教授案形式でモデル化することに成功した。

そのモデル化の過程を「オーセンティック概念に基づく社会科授業開発モデル—知識構築型授業への転換—」『教育実践総合センター紀要』（長崎大学教育学部）第6号、2007年3月、79頁～91頁にまとめることができた。

- (2) オーセンティック・アセスメントの代表的教材を取り上げ、社会構築主義社会科教育の特質を考察し、学習成果の側面から学力像をモデル化した。結果、オーセンティック・アセスメント社会科は、自己の見解を社会諸科学の分析方法と民主的価値

値により正当化し、行動できるかどうかを学力モデルとして設定していることが明らかになった。

その成果は「市民的行動力を育成する社会科の学力モデル—Real-World Investigations for Social Studiesの場合—」『日本社会科教育学会 全国大会発表論文集 第3号』2007年10月、210頁～211頁にまとめることができた。

- (3) さらに教材分析としてアメリカで発刊された博士論文の記述内容とそこに表れている授業案の再現・分析を行った。

その成果は、「Authentic Assessmentの授業構成原理—学びの文脈に着目して—」全国社会科教育学会 第55回全国研究大会自由研究発表 福井大学 2006年10月29日にまとめることができた。

- (4) 社会科のスキル育成を目標とする社会科プロジェクトの再現・分析を通して、教授・学習過程をモデル化し、構成主義社会科の教科論の本質を明らかにしている。

その成果は、藤本将人・福田正弘「知識構成型社会科授業モデル—ポートフォリオによる知識構成過程のメタ認知—」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部) 第5号、査読なし、2006年3月117頁～127頁にまとめることができた。

本研究で積み残した課題としては、以下の点を挙げることができる。

- (1) 教育現場で使用可能な評価ツールの開発  
教育実践の事実の確定と分析に研究時間の大半が費やされたため、当初予定した評価ツールの開発までには至らなかった。
- (2) 評価テンプレートの作成  
現場教師の目標準拠評価の授業づくりに資するため、オーセンティック・アセスメントにおける主要な評価用具である「評価テンプレート」をWeb上に作成する予定であった。しかし、評価テンプレートの収集数が少なく、更なる現地での資料研究が必要であるという認識に至った。

- (3) 現場教師によって行われた授業の収集  
研究代表者の目指す研究の到達点は、小学校、中学校、高等学校、大学を一貫するオーセンティック・アセスメントの授業、評価の在り方を明確化することであった。本来ならば、全ての学校種の授業を手に入れたいと考えていたが、本科研では、小学校の事例しか収集することができなかった。さらなる事例収集が必要であるという認識に至った。

- (4) (1)～(3)の視点を踏まえて、教科教育学の手法による具体的授業の再現・分析、それを根拠とした評価原理の考察を行うことが課題であるという認識に至った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 藤本将人「市民的行動力を育成する社会科の学力モデル—Real-World Investigations for Social Studiesの場合—」『日本社会科教育学会 全国大会発表論文集 第3号』、査読なし、2007年10月、210頁～211頁
- ② 藤本将人「オーセンティック概念に基づく社会科授業開発モデル—知識構築型授業への転換—」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部) 第6号、査読なし、2007年3月、79頁～91頁
- ③ 藤本将人福田正弘「知識構成型社会科授業モデル—ポートフォリオによる知識構成過程のメタ認知—」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部) 第5号、査読なし、2006年3月、117頁～127頁

[学会発表] (計2件)

- ① 藤本将人「市民的行動力を育成する社会科の学力モデル—Real-World Investigations for Social Studiesの場合—」日本社会科教育学会 第57回全国研究大会、於：埼玉大学2007年10月8日
- ② 藤本将人「Authentic Assessmentの授業構成原理—学びの文脈に着目して—」全国社会科教育学会 第55回全国研究大

会 福井大学 2006年10月29  
日

〔図書〕（計5件）

- ① 藤本将人「新設・新装の単元づくりのヒント 中学校 持続可能な社会＝単元づくりのヒント」『社会科教育 2008年 11月号』明治図書，2008年11月1日，56頁～58頁.
- ② 藤本将人「新要領に登板“用語・言葉”の分析と解釈 小・中を通じた“知識概念用語”の分析と解釈」『社会科教育 2008年 10月号』明治図書，2008年10月1日，27頁～29頁.
- ③ 藤本将人「新指導要領・私の読解ポイントはここだ」『社会科教育 2008年 7月号』明治図書，2008年7月1日，11頁.
- ④ 藤本将人「高齢化社会と少子化社会」「公害と環境破壊」「国益と人類益」「直接民主主義と間接民主主義」「独占と寡占」「二大政党制と多党制」「ワークシェアリングとアウトソーシング」岩田一彦・片上宗二・池野範男編『社会科“間違いやすい・紛らわしい用語” 指導辞典』明治図書，2007年11月，235頁，239頁，240頁，289頁，290頁，293頁，313頁.
- ⑤ 藤本将人「愛国心とナチズムーマキシマムとミニマムの各200字」『社会科教育 2007年9月号』明治図書，2007年9月1日，88頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤本 将人 (FUJIMOTO MASATO)  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号：10404229

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者